

平成二十六年 度（第2回）高校生世代「人権の詩^{うた}」

【入選】

はじまりのうた

大山 天良

ねえ 君が無心に追うその白球の先に何が

見えるのかな

ねえ そのほとぼしる情熱はどこへ向かつ

ているのかな

無音の空間で繰り広げられる勝負の世界

君は呼吸に反応し 友らは鼓動で応える

僕はその一体感に美しさを感じたんだ

ああ 深い海に潜ったような

何も聞こえない漆黒の世界で

ああ この青空が涙の雫で溢れるように

どれだけの悲しみを数えただろう

そんな君の聞こえないという現実だけを

僕は僕だけの価値観で押し量っていたんだ

君は君だけの世界を生きているのではない

そよぐ風のように 自然に

流れる音楽のように あたりまえに

認め合い共に生きているんだ

その泥だらけのユニフォームが

眩しい笑顔が

その指文字が教えてくれた

自分の心の行方を見失い

それでも再び手繰り寄せたこの気づき

今日僕が流した涙を僕は裏切らない

君が石見で弧を描き投げ放したこのボールを

僕はここ出雲でしっかり受け止めた

さあ 「プレイボール」のサイレンが鳴ったよ

さあ 君にも届いてるよね

さあ 走り出そう 皆の待つグラウンドへ

見上げた空は青くまばゆく輝いている